小学部低学年における学びの姿勢の育成を目指した日常生活の指導

～　各教科等の内容を踏まえた朝の会を通して　～

沖縄県立大平特別支援学校　小学部　照喜名　雅乃

Keyword：日常生活の指導，朝の会，各教科等を合わせた指導，学びの姿勢

Ⅰ　目的

１　はじめに

新学習指導要領の改訂に伴い、本校でも教科別の指導の充実に向け、教育課程の編成を行った。しかし、低学年や授業の一部においては、児童の障害の状態等に即した指導を進めるため有効と考えられる場合には、「各教科等を合わせた指導の形態」を選択して行っている。各教科等を合わせた指導は、各教科等の内容を幅広く習得し、学習状況等に応じて課題を細分化し、段階的な指導ができる。知的障害の状態、学習状況や経験等を踏まえながら一人一人の教育的ニーズに合わせ、計画的に指導している。日常生活の指導においては、生活科の内容を中心に反復して行い、習慣化していく段階を経て、各教科等の内容に即した学習ができる。個々の実態に応じた効果的な指導形態だと考えられる。

本研究の対象は、小学部１年生男児３名、女児１名で、中等度・重度知的障害のある自閉スペクトラム症３名、ダウン症１名の計４名の学級である。コミュニケーション面では、発語や簡単な応答が可能な児童、発声や身振り等で要求を伝える児童等、呼びかけや問いかけに反応が難しい児童もいる。また注意を受けたり、思い通りにならないと癇癪を起したりする児童や注意散漫な児童、離席の多い児童等、学校生活や集団活動に慣れず、学習に向けた姿勢や態度（着席・見る・聞く等）が身に付いていない状態で、教科別学習への工夫・移行が難しい状態である。そこで１日の始まりである朝の会に毎日取り組むことで、学校生活に慣れ、活動の見通しを持たせたい。また生活科の内容を中心とした各教科等の内容を踏まえつつ、個々の目標や学習の保障に繋げていきたいと考え、本研究のテーマを設定した。

２　研究の目的

(1) 朝の会を繰り返し行うことで、学習に向けた姿勢や態度を身に付けることができるであろう。

(2) 朝の会を通して、関連する各教科等の内容を踏まえることで個々の目標達成につながるだろう。

Ⅱ　方法

１　対象児について

表1　児童の実態

	S-M社会生活能力検査	児童の実態
A児	10 か月未満	・手引きで要求を伝える。・多動で離席が多い。・発声はあるが発語はなし。 ・注意散漫・呼名に反応なし。
B児	10ヶ月	・簡単な身振りを模倣する。・呼名で手を挙げる。・急に癇癪を起こす。・多害、自傷がある。・発声はあるが発語なし。
C児	1才 8ヶ月	・簡単なコミュニケーションができる。・1～10までの数唱と数字を読むことができる。 ・自分や友達の名前カードが分かる。 ・呼名に「はい。」と返事ができる。 ・注意散漫で活動に集中することが難しい。
D児	1才 10ヶ月	・自分や友達の名前カードが分かる。・呼名に「はい。」と返事ができる。 ・言葉でのコミュニケーションができる。 ・注意散漫で活動に集中することが難しい。・苦手なことがあると座り込む。

２　研究の計画

表2　研究計画

1学期	2学期	3学期
・児童の実態把握 ・テーマ設定と計画の作成 ・授業実践及び反省	・理論研究 ・授業実践及び反省 ・反省及び改善点の検討	・授業実践及び反省 ・研究のまとめ ・継続指導

Ⅲ　結果

１　指導の実際と結果

(1) 朝の会の流れ

集合『はじまるよ』　手遊び『ひげじいさん』

①　はじめのあいさつ④　カレンダーワーク

②　あさのあいさつ　⑤　今日の日程

③　健康観察　　⑥　おわりのあいさつ

(2) 取り組みと変容

表3　関連する各教科等の目標（一部抜粋）

	朝の会の目標	関連する各教科等の段階、内容
A児	・教師のあいさつに合わせて礼がで	「おーい」等（生

A児	きる。(知・技) ・名前カードを自分の顔写真の下に貼ることができる。(思・判・表)	１・オ－（ア） ・国１・ア－（ア） 「〇〇くんいるかな」(算１・Ａア－㋐)
B児	・教師の手本（手遊び）を見て自分なりに表現しようとしている。（主） ・呼名に発声したり手をあげたりして返事ができる。(知・技)	表現遊び（音１・Ａ－エ・自活） 「やってみよう」（生１・オ－（ア） ・国１・ア－（ア）
C児	・出席している児童の数を数えることができる。(思・判・表) ・自分や友達の名前カードが分かる。(思・判・表)	「かぞえてみよう」(算１・Ｂ－ア) 「おーい」（国１・Ｃ－イ）
D児	・自分と友達の名前の文字を一文字ずつ並べることができる。(思・判・表) ・役割（日直）を理解し、会を進めようとする。(知・技)	「よんでみよう」（国１・C-イ） 「やってみよう」（生１・カ－（ア）・特）

表4　学期ごとの変容

	１学期
様子	・着席できず、寝転んだり走り回ったりしていた。(全) ・教師が横に座っても一人が離席すると他児も離席するといった連鎖反応が起き、会を進めることが難しい(全)
取り組み	・『はじまるよ』の曲を流し、気持ちの切り替えを行った。 ・席に誘導し、教師が横に座る。着席が難しい場合には、好きな物（絵本やぬいぐるみ等）を持って参加。 ・手遊びをし、楽しい雰囲気をつくる。 ・始めは、会の時間を１５分程度と短くし、参加に慣れるようにし、少しずつ内容を増やした。
変容	・始まりの合図に慣れ、曲が流れると遊びを終えようとする姿が、見られるようになった。(D児) ・会への参加に慣れ、離席はあるものの会に最後まで参加できるようになってきた。(全)

	２学期
様子	・自分なりの参加の仕方（教師の上に座る等）で落ち着いて会に参加できるようになってきた。(A児) ・流れを覚え、あいさつ等ができるようになってきた。(C児・D児)
取り組み	・自分の名前カードが分かる児童には、姓と名を分けたカードを作成し、並べ替えの課題に移行。(C児・D児) ・自分のカードを貼ることが難しい児童には、自分の場所を固定し好きなキャラクターで提示。(A児・B児)
変容	・始まりの曲が流れると自ら椅子を前に運ぶ児童が２名(C児・D児)。他２名は、教師と一緒に椅子を準備すると自ら座るようになった。(A児・B児) ・絵本がなくても着席できるようになってきた。(A児) ・教師の声に耳を傾けるようになってきた。(全) ・教師の提示した天気カードを見る、選択することができるようになってきた。(A児・B児)

	３学期
様子	・積極的に、日直や挨拶を行う姿が見られるようになってきた。(C児・D児) ・離席があっても言葉かけで戻ったり、気持ちの切り替えが早くなったりして、会に参加できるようになった。(A児)
取り組み	・児童に合わせて、できるだけ指示や支援を減らし、自分で考えて行動できるようにした。 ・言葉でのコミュニケーションを取れる児童には朝ごはんや登校手段等を問いかけ、応答する（C児・D児）
変容	・会に参加する時間が長くなってきた。(A児) ・日直の際には、自ら会を進めようとする様子が見られるようになった（C児・D児） ・名前カードを自分の顔写真に貼ることが分かってきた(A児・B児)。

Ⅳ　考察

入学当時は、集団活動や着席などの経験不足、未発達な段階等から学習に向かう姿勢や態度が身に付いていない状態であった。毎日の朝の会を通して着席、挨拶等の姿勢を身に付けながら個々の目標や学習の保障につなげたいと思い、本研究を行った。繰り返し行った朝の会で、少しずつ学校生活の流れを知り、見る、聞く、着席する等の姿勢が培われていった。また関連する各教科等の目標や内容を教師が意識して取り組むことで、個に応じた目標や内容を設定し、関連する各教科等の目標の達成につなげることができた。朝の会と同様に教科別の指導でも、授業の始まりに音楽を使うことで着席できるようになった。また、教師の話に耳を傾けたり、問いかけに応答したりすることができつつある。

今後は、さらに教師間の連携、共通理解を図り、個に対応した指導を充実させ、発展的・継続的な指導の工夫と教科別指導へとつなげていきたい。

《引用・参考文献》

・『特別支援教育研究』東洋館出版社　2017,5　2021,7, 8
・三津浦光哉,岩松雅文,川村修弘　『知的障害教育の「教科別の指導」と「合わせた指導」』ジアース教育新社　2021
・学習指導要領各教科解説　各教科編　（小学部・中学部）

生き生きと自信をもち自分達で進める朝の会活動

～交流学級での生活につながる日常生活の指導を通して～

佐賀県多久市立東原庠舎中央校　　教諭　江口 侑里

Keyword：視覚支援，ICT，あいさつ活動

Ⅰ　はじめに

本学級の児童３名は､今年度入学した１年生である。初めての学校生活に慣れることができるよう、１校時目に日常生活の指導の時間を設定し(週に３～５時間)、朝の会の活動を通して、基本的な生活習慣や集団生活をする上で必要な内容について取り扱うようにした。入学して少し落ち着いた５月の連休明けから本学級での朝の会の取り組みを開始した。

Ⅱ　児童の実態

本学級の児童は１年生男児２名（双生児)、女児１名の計３名である。

○A児（男児、双生児の弟、知的障害）

自分の快・不快を声で表す。指導者が話す内容は概ね理解することができる。集団での活動に関心を示すことが少なく、一人でお絵描きなどをして過ごしている。初めての環境や予定が分からないときなどは不安定になり、声をあげて泣き出す。

○B児（男児、双生児の兄、知的障害、ＡＳＤ）

発音は不明瞭だが簡単なやり取りができる。指導者が話す内容は概ね理解することができる。人とかかわることや人前で話すことを好み、積極的に集団にかかわろうとしている。自分の思いが伝わらないときや失敗してしまったときは、人や物に当たることがある。初めての環境や予定が分からないときなどは、不安定になりやすい。

○C児（女児、知的障害）

指導者が話す内容は概ね理解することができる。初めての環境や自信が持てない場面では、緘黙、緘動の傾向が見られる。集団活動は好きで、人とのかかわりを持つことも好んでいる。どの活動にも意欲的に取り組もうとする。

以上の児童の実態から、朝の会の活動では、①イラスト等による視覚支援やＩＣＴ機器の活用を行いながら、②一日の見通しを持たせる活動や、③職員室の教師との交流活動を取り入れることにした。

Ⅲ　実際の授業と指導

1. 朝の会の流れ

（１）朝のあいさつ

（２）健康観察（呼名、返事）

（３）今日の予定の確認等（日付、天気、時間割）

・６月から「がんばりたいこと」､「楽しみなこと」の一言スピーチを取り入れた。

（４）今日の給食の確認

（５）朝の運動

・ラジオ体操や簡単なダンスを手本の動画を見て踊る。５月末の運動会で踊るダンスの練習も取り入れた。

（６）職員室の教師との交流

・職員室まで廊下を一列に並んで歩く。あいさつを交わしたり、サインをもらったりして教師との交流を行う。

2. 指導上の留意点

・５月上旬～６月下旬までは、手本として担任が司会進行を行った。７月頃からは児童が司会を行うようにした。

・児童がタブレット端末で朝の会のスライドを操作することで、イラストを見て自分達で次の活動を理解して、司会進行ができるようにした。

・A児も朝の会の進行ができるように、スライドに教師の音声を取り込み、操作できるようにした。

写真１　タブレット端末を操作し朝の会を進める児童

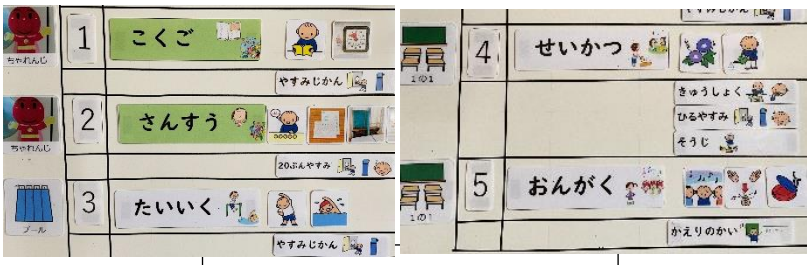

写真２　イラストによる視覚支援（時間割）

Ⅳ　指導を通して

1. 視覚支援・ＩＣＴ機器の活用

視覚支援を通して、会話や文字から情報を理解できない児童は、イラストから意味を理解したり、想起したりすることができるようになった。朝の会のスライドにイラストがあることで、児童は次の活動をすぐに理解し、「健康観察をします。」などの司会の言葉を自分から話すことができるようになった。

ＩＣＴ機器の活用の点では、スライドの中に司会の音声を録音しておくことで、A児は進んで朝の会の司会を担うことができるようになった。

視覚支援やＩＣＴ機器の活用によって、児童が自分で朝の会を進めることができるようになり、活動に対する自信につながっていったと考える。

2. 一日の予定を確認する活動

入学当時は授業の内容が分からず不安な様子が見られたが、朝の会の中でイラストを用いて、授業の内容や時間割の確認をすることで、小学校の時間割を次第に理解していくことができた。B児・C児は「今日は天気が雨だから、プールに入ることができない。」「今日は水曜日だから掃除はない。」といったことを朝の時間に確認し、見通しを持って生活することができた。A児も、一日の生活の中で活動が終わるごとに、そのカードを外して次の活動を確認する様子が見られた。

時間割の理解や先の見通しを持つことができたことで、落ち着いて生活することにつながったと考える。

3. 職員室の教師との交流

毎日あいさつをしてくれる教頭や主幹教諭の顔と名前を覚え、B児・C児は自分から大きな声であいさつをするようになった。廊下で見かけたときなどには、B児は「〇〇先生。」と呼び止め、積極的にかかわっていた。また、毎日シールをくれる教師との交流を楽しみにしていて、毎日貼るシールを貯めて喜んでいた。毎朝の交流を通して、教師とのかかわりが密になり多くの先生に児童の特性等を、理解してもらうことにもつながった。

Ⅴ　交流学級での生活にも表れた成果

1. 廊下の歩き方

職員室へ行くためには、教室から職員室までの長い廊下を歩いていく必要がある。廊下を並んで歩くことには課題があり、A児・B児は入学当初は、自分が行きたい場所へ走って行ってしまい、集団の中で並んで歩けないことが多かった。しかし、朝の会で職員室の先生に会いに行くという目的ができたことで、静かに順番を守って歩くことを意識しながら、移動することができていた。毎日の積み重ねで、一学期末には交流学級の中でも列から飛び出さずに、みんなと一緒に歩くことができるようになってきている。

2. 集団での活動への参加

A児は集団での活動に意識が向きにくかった。しかし、朝の会の活動を続けていくうちに、朝の運動・ダンス、あいさつ活動には関心を示すようになってきた。そこで運動会のダンスを本学級の朝の会に取り入れた。運動会の全体練習の前から予習的に取り入れたことで、本人の自信につながり、全体練習への参加につながった。

3. 交流学級での司会

本学級の朝の会で司会を務め自信をつけたことで、人前で話すことに緊張してしまうC児も、交流学級で健康観察の返事ができるようになった。一学期末にはB児・C児は交流学級でも日直として、朝の会で物怖じせずに司会をすることができるようになった。

Ⅵ　まとめ

朝の会の活動で、視覚支援を用いて一日の見通しを持たせ、児童の活躍の出番を作り、人とのつながりをもつ機会を仕組んだことで、児童にとって安心して一日をスタートできる朝の始まりの時間をもつことができていた。また、本学級の朝の会の活動の中に、交流学級での生活につながる活動を無理なく仕組んでいくことで、児童の集団参加への自信につなげることができた。朝の会の活動は本学級の児童にとって大切な時間であり、これからも充実させていきたいと考える。

写真３　職員室の教師との交流の様子

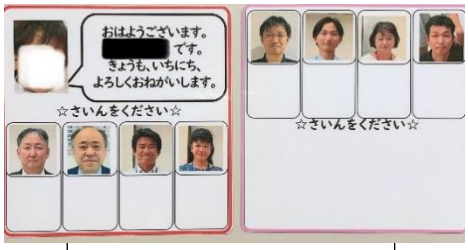

写真４　あいさつカード